

【第四回東日本大震災国際神学シンポジウム】

パネルテーマ「線香の一本でもあげていけ」

宣教論的問い直し——教会のあるべき姿を求めて

米内 宏明

序

私のテーマは「教会のあるべき姿を求めて」の宣教論的問い直しです。

そもそも「教会のあるべき姿」を問う必然性はどこにあるのでしょうか？

あるとすれば、それは東日本大震災で被災地となった特別な状況下で、宣教の主体（あるいは当事者）であろうとした教会が自らの姿を顧みる（セルフイメージの問い直し、あるいは自分をモニタリングする）ところにこそあると言えましょう。

ですから、今日の発表の中心は、教会の姿を伝道プログラムや宣教方策としてではなく、教会の性質として捉え直すことです。ケーススタディとして、また教会を考える上での試みとしてお聞きくだされば幸いです。被災地に限らず、日本の他の地域での宣教にも共通するテーマになると信じます。

1 「線香の一本でもあげていけ」

まず、教会の性質を捉え直すきっかけとなったことをお話しします。

「線香の一本でもあげていけ。」……このことが投げかけられた状況を説明します。

私どもの教会のボランティアチームが、宮城県津波の被害にあった沿岸部で活動していたことです。彼らの背中越しにかけられたことがそれでした。

彼らが私に後から話してくれたところによると、その中年の男性はその場所でお母様を亡くされたとのこと。青年の彼らにとっては、その男性との年齢差と場所が場所であっただけに、十分にこちらの意図などをその男性に伝えきれないまま帰ってきたのです。しかし、あの状況で男性からよくそこまで聞き出したものだと感じしました。私だったらできなかったかもしれません。

その日の夜の打ち合わせ会ではこれをテーマにしました。「どうしたらよかったのか?」「これからどうすべきなのか?」。そして何よりも「そこで何を感じたのか?」と。

ここで被災地支援をする場合、死を抜きに関わりきれない現実には彼らが気づきました。生き残っている人々の背中には家族や友人、知人らの多くの死が背負われていることを。それは大人だけではなく、子どもたちも同じです。子どもたちと接するとき、口にはしなくても、その小さな背中に背負われている多くの死を、支援する者たちは背負わなければならないのです。

イエス・キリストは生きること、いのちを語るときに、しばしば死について触れました。私たちもいのちを語るので

あれば、死を抜きにはそれを語り得ません。イエスが死そのものを扱われたように、私たちも避けて通れないのです。

しかし、多くの、しかも若いクリスチャンたちは、クリスチャンでない方々の死に直面する経験がおよそ少ないのです。そのクリスチャンたちがいわゆるクリスチャン・ホームに生まれ育ち、その世界で生きてきている人たちであれば、日本に特有の非キリスト教的な死者儀礼に対する知識と実戦経験は当然少ないのです。これは致し方ない現実で、あそこで問われたのは、単に線香をあげるべきかどうか、焼香すべきかどうか、ということではなく、また死後は天国か地獄かというような話でもなく、これは生きること、死ぬことを人間がどう受け止めるのかというテーマでした。

ではこの投げかけをどう受け止めようとしたのかを、その時の当事者であったボランティアのことばから振り返ります。

死を扱うことは、キリスト教内部における死者儀礼のみならず、他宗教の人々の死をどう受け止めるか、つまりはその人格 (whole person) をどう受け止めるか、ということにつながってきます。

支援チームの中の一人がこう口にしました。「被災した子どもを支援するとき、きつとこの子のお父さんお母さんが生きていたら、この姿を見て喜ぶだろうな、とか、こうしたらきつと嬉しいだろうなと想像して子どもたちに接している。それはかつて教会で親を亡くした子どもと接したときに、お母さんだったらこうするかとか、きつとこうしたいと願っていただろうな、と考えたことから、そう思うようになった。その意味で、子ども支援は私にとっては、死者儀礼でもある」と。

「日本という社会においては、ここに切り込むことを抜きに、仏式の葬儀式で線香をあげることが良いか悪いかという議論だけに終始してしまっていたのではないか」「それでは表面的な対応しかもたらさず、かえってこの自分が生きている世界からの逃げでしかない。逃げていては、今回の震災という無数の死を遂げた人々とその遺族の痛みへ届くこ

とがない、のではないか」などでした。

被災地から「教会のあるべき姿」を問うとは、私たち自身が福音はこうだ、あるいは福音をこう理解しているという概念（枠組み）自体を問い直すことです。これまでの枠組みだけでは対応しきれない現実と課題を見ようとする事です。神学は実践の現場から構築されるはずののですが、その現場を抜きに「教会のあるべき姿」を見つけることができないのかもしれませんが。

2 ライフコーディネーターとしての教会

その問い直しから、私が教会について考えていることがあります。

それは「ライフコーディネーター（あるいはライフサポーター）としての教会」です。

そもそも何をもって「宣教」と定義するかは大きな課題です。しばしば宣教の主体となるこちら側（教会側）の理屈が先行しやすいので、ここでは被災地という視点から宣教を考えてみる必要があります。

被災地と呼ばれる市町村にあつては、緊急避難の時期を除けば、現在に至るまでの大きな課題は「新しいコミュニティの創成」です。この「コミュニティの創成」に対して、教会は何ができるのか、なのです。

そこで、コミュニティの創成に焦点を当てて、宣教の目的を仮に次のように定義してみました。「宣教とは、イエス・

キリストにある人生を人々に提供し、人々が豊かに生きること」と。すると、もはや教会は被災者を支援するボランティアにとどまらず、あるいは教会の中に人々を招くことにとどまらず、そのコミュニティと人々の全体を活かすライフ・コーディネーターであるときえ言えるのではないでしょうか。

3 コミュニティの原点は教会にあると言える理由

実は、教会はコミュニティと人々の全体を活かす性質を持っているのではないかと考えています。

コミュニティということばは、コミュニケーション（聖餐／主の食卓）から派生したとも言われます。異質な（多様な）一人ひとりが、一緒に食卓を囲む。ここに教会の中心的な性質がよく現れていると思いませんか？

震災直後の被災地でのことです。被災した方々とクリスチャンのボランティアが一緒におにぎりを食べていました。電機・ガスがまだ復旧しきっていなかったたので、まさに汗も涙も分け合って食べていました。するとあるおばさんが「はあ、クリスチャンってこんな顔してんだな」と。というのは、「教会の建物は見たことがあつたけど、どんな人間が通っているかわかんなかった」と言うのです。「でも、いまあんたたちのような顔だつてわかつた」と。

新約聖書を読んでいくと、初代の教会では異質な者同士が同じ食卓を囲んでいる様子が浮かんできます。あるいは席を同じくする様子です。男も女も、自由人も奴隷も、ギリシャ人もユダヤ人も区別なくです（コロサイ三・一一、等）。そこには理想としての姿としてだけではなく、実際に一緒にそこにいるという様子が目に浮かびます。

こんなところに、教会がコミュニティを創成する（リードする）ヒントがあるように思うのです。ここから宣教論、教会論を語らないと、教会は自己主張だけをしてしまつて、現代における新しいコミュニティの創成をリードするなど、あり得ないのではないかと思わされます。これは自戒を込めています……。

「宣教する教会」とは、教会成長という自己増殖を目的とする前に、教会がもとも持っている性質に生きる教会であらうとすることではないでしょうか。

結 「教会を始めてもいいんじゃないの？」

最後に別の方の声を紹介して閉じます。

クリスチャンでない方からの声かけです。それは「教会を始めてもいいんじゃないの？」でした。

もう、びつくりしました。

でも問題は次です。

この方がイメージしている教会の姿と、牧師が一般的に考える「教会を始める」といったときの中身は同じでしょうか。もし違うのだとすれば、違いはどこにあるのでしょうか。ここを問い続ける責任があるのではないかな、と考えています。

ちなみに、この方がイメージしていた教会とは、日曜日の特定の時間に集うことを中心とするよりは、日常の相談に乗ってくれたり、一緒に祈つてもらったり、食事を共にしたり。あるいは笑い合ったり、涙を流したり、聖書のことば

で励ましてもらったり、というようなことでした。一方、牧師であれば、おおよそ「日曜日の何時に礼拝です。来てください……」という感じになるでしょうか。

教会の性質を捉え直すとき、そこにおのずと見えてくる教会の姿があるように思われます。教会形成は、その教会への帰属そのものを目的とするのではなく、ローマ人への手紙一二章一五節にあるように「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」という身近な日常性と、画一的ではなく、一人ひとりと全人格的に寄り添う姿を求めることなのかもしれません。